

佐久市埋蔵文化財調査報告書 第220集

筒畑遺跡群 TABATA  
田端遺跡 I

長野県佐久市新子田 田端遺跡 第1次調査

2014.3

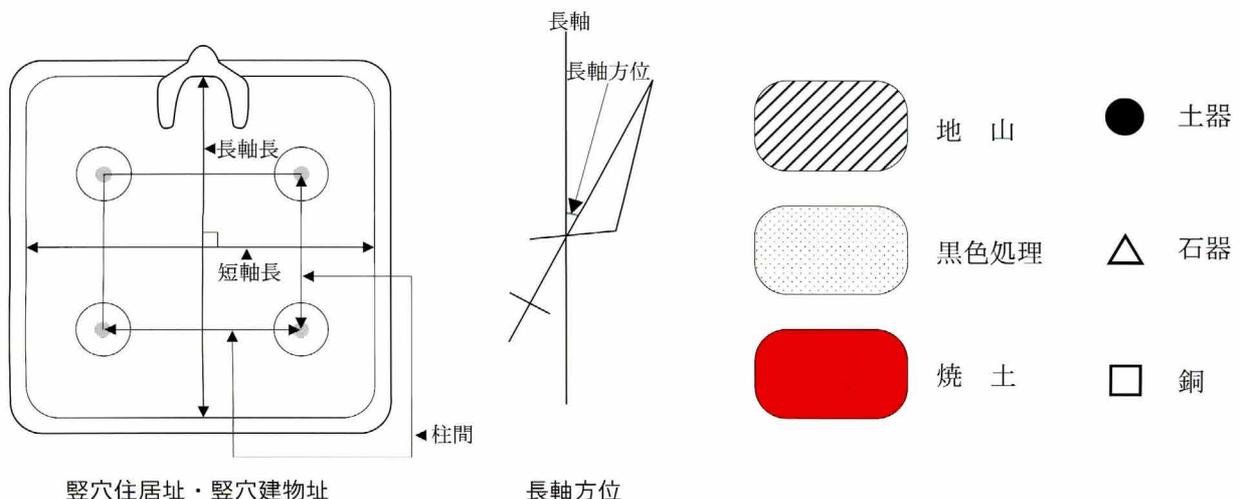
佐久市教育委員会

## 例 言

- 1 本書は長野県佐久市に所在する筒畑遺跡群田端遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 調査は株式会社平和不動産が行う宅地造成に伴う記録保存を目的に佐久市教育委員会が実施した。
- 3 遺跡名及び所在地 田端遺跡（ITB） 佐久市新子田字田端935-12番地他
- 4 調査期間及び面積 発掘作業：平成元年7月5日～7月8日  
整理作業：平成元年7月9日～平成2年3月31日  
平成25年5月15日～平成26年3月31日  
調査面積1,826㎡
- 5 発掘作業及び平成元年7月9日～平成2年3月31日までの整理作業については、原因者負担により実施し、平成25年5月15日～平成26年3月31日の整理作業及び報告書刊行は全額を国庫補助金及び市費の公費により作成した。（平成25年度市内遺跡発掘調査事業）
- 6 本書に掲載した地図は佐久市発行の都市計画図（1：2,500）、佐久市教育委員会作成の遺跡詳細分布図（1：5,000）である。
- 7 本書に掲載した遺構図は、平板測量で作成され、発掘当時の調査団により、図面修正が行われていたものに加筆・修正し、Adobe Illustratorでデジタルトレースし作成した。
- 8 遺物実測図は当時の調査団が作成したものは加筆・修正を行い、未実測のものは手取り実測し、Adobe Illustratorでデジタルトレースし作成した。
- 9 遺構写真は当時の調査団が撮影したものをスキャニングし、遺物写真はデジタル一眼レフカメラで撮影し、Adobe Photoshopで補正等を行いAdobe Illustratorで版組を行った。
- 10 本書の作成は小林が行った。
- 11 本書及び発掘調査の図面・写真などの記録及び出土遺物は、佐久市教育委員会の責任下に保管されている。

## 凡 例

- 1 遺構の略記号は竪穴建物址-H、掘立柱建物址-F、ピット-Pである。
- 2 挿図の縮尺は遺構1/80、遺物1/4を基本とする。これ以外のものは挿図中のスケールを参照されたい。
- 3 遺跡の海拔標高については、当時の記録に記載がないため不明である。また、土層の色調は、標準土色帖に基づいている。
- 4 遺物挿図番号・遺物写真番号・遺物観察表番号は一致する。
- 5 調査区グリッドは任意に設定されており、間隔は4mである。
- 6 遺構の計測値は下図に示した部分の測定値である。面積は床面積、壁残高は最大値である。
- 7 挿図中における網掛は以下の表現である。



## 目 次

例言・凡例

目次

第Ⅰ章 発掘調査の経緯	1
第1節 調査の経緯	1
第2節 調査体制	1
第3節 遺跡周辺の環境	2
1 遺跡の地理的環境	2
2 遺跡の歴史的環境	2
3 基本層序	3
第4節 検出遺構・遺物の概要	4
第Ⅱ章 遺構と遺物	4
第1節 住居址	4
○H 1号住居址	4
○H 2号住居址	4
○H 3号住居址	6
第2節 掘立柱建物址	6
○F 1号掘立柱建物址	6
○F 2号掘立柱建物址	7
第3節 ピット	9
第4節 遺構外出土遺物	10
第Ⅲ章 まとめ	10
写真図版	15
報告書抄録	
奥付	

## 挿 図 目 次

第1図 田端遺跡Ⅰの位置	1
第2図 周辺遺跡	3
第3図 基本層序模式図	4
第4図 H 1号住居址	5
第5図 H 1号住居址出土遺物	6
第6図 H 2号住居址	7
第7図 H 2号住居址出土遺物	8
第8図 H 3号住居址	9
第9図 F 1号掘立柱建物址	9
第10図 F 1号掘立柱建物址出土遺物	9
第11図 F 2号掘立柱建物址	10
第12図 ピット	11
第13図 遺構外出土遺物	10
第14図 田端遺跡全体図	14

# 第 I 章 発掘調査の経緯

## 第 1 節 調査の経緯

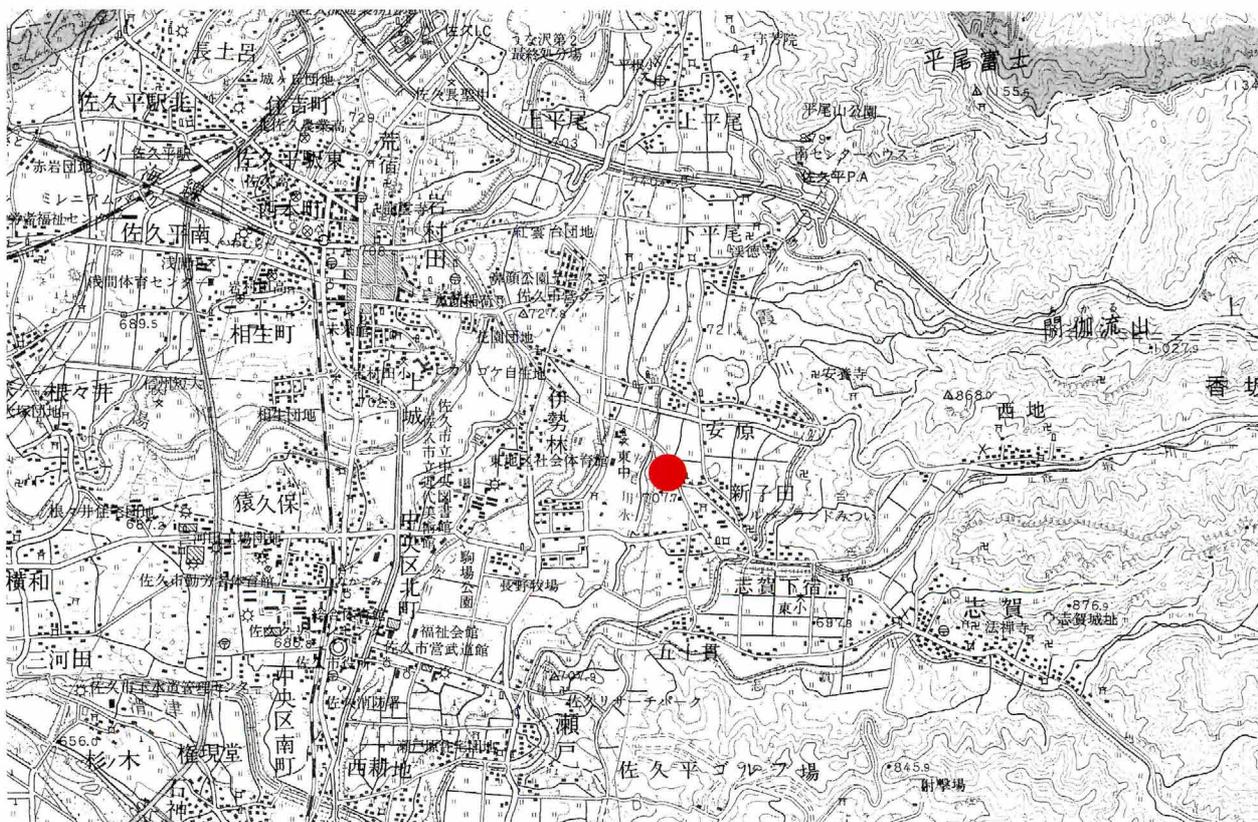
平成元年 4 月 28 日、(株) 平和不動産より筒畑遺跡群田端遺跡内における宅地造成事業計画に伴う埋蔵文化財発掘の届出が提出された。保護協議の結果、記録保存調査を行う事となり、同年 7 月 3 日、佐久市教育委員会は文化庁長官に埋蔵文化財発掘調査の通知を行った。同日、佐々木宗昭氏に発掘調査担当者を委嘱し、承諾を得た。また、土地所有者の承諾も同日、平和不動産より得た。同年 7 月 5 日に佐久市教育委員会は(株) 平和不動産と埋蔵文化財発掘調査委託契約を締結し、同日から発掘調査に着手、同月 8 日に調査を終了後、平成 2 年 3 月 31 日までに、遺物洗浄・注記、調査記録の整理等の作業を完了した。

平成 25 年度市内遺跡発掘調査事業の一環として本書を刊行した。

## 第 2 節 調査体制

平成元年度

調査主体者	佐久市教育委員会	教 育 長	大井昭二 (6 月 退任) 大井季夫 (7 月 就任)
事 務 局	社会教育課	次 長	茂木多喜男
		課 長	北澤 馨
			相沢幸男 (社会教育課主幹)



第 1 図 田端遺跡 I の位置 (1 : 50,000)

		係 長	小平 実
		係	東城公人、小林正衛（～7月）、林 幸彦 荻原一馬、山浦俊彦、須藤隆司、羽毛田卓也 田村和広、竹原 学、掛川由香利（～8月） 中沢菊江（9月～）
調 査 団		調 査 団 長	白倉盛男
		調 査 副 主 任	藤沢平治
		調 査 担 当 者	佐々木宗昭
		調 査 補 助 員	金森治代、小林よしみ、橋詰勝子、橋詰けさよ 細萱ミスズ、星野良子、山崎平八郎
		協 力 者	浅田 務、堀籠 因
平成25年度			
調査主体者	佐久市教育委員会	教 育 長	土屋盛夫
事 務 局	社会教育部	部 長	矢野光宏
	文化財課	課 長	三石宗一
		調 査 係 長	比田井清美
	文化財調査係	係	須藤隆司、小林眞寿、富沢一明、上原 学 神津一明、久保浩一郎
		嘱 託 職 員	林 幸彦
		調 査 担 当 者	小林眞寿
		調 査 員	磯貝律子、上原美代子、小島 真、副島充子 中沢 登、中山清美、細谷秀子、柳沢亜矢子 依田好行

## 第3節 遺跡周辺の環境

### 1 遺跡の地理的環境

我国を代表するA級火山である浅間山は標高2,560mを測り、上信国境に聳える。その活発な火山活動により、数多くの災害をもたらしたが、その優美な姿は地域のシンボルとして親しまれてきた。

田端遺跡は浅間山の南斜面山麓が佐久平の平坦面に交わってゆるやかな南傾斜の続く、標高710～720mの湯川東沿岸台地上に立地している。この台地には平尾富士、八風山、物見山、熊倉峰、荒船山と続く分水嶺から延びる尾根が幾筋も垂下しており、尾根間の谷を流れる数多くの河川が千曲川に注ぎ込んでいる。

台地を形成しているのは浅間山の火山噴出物であり、主体となるのは一万年前以上前の軽石流である。所謂「P1」・「P2」であり、P2中の炭化木のC14年代測定では10,650～11,300年前の測定値が出ている。この堆積層は未分解で粘土化しないため、凝結力が乏しく、水の浸食に対し抵抗力が著しく低いため、一度流路となると大きな断面が垂直に近い谷に発達する。これが「田切地形」であり、佐久市の北部地域には田切の初期地形が数多く認められる。当遺跡の西にも南北に延びる田切初期地形の谷が隣接し、谷底に平尾用水が引かれている。

周辺部の地質は、平尾富士を構成する平尾溶岩、荒船山の噴出物である溶結凝灰岩、相浜層などが認められる。平尾溶岩は所謂「佐久産姫小松石」、溶結凝灰岩は「安原石」として良質な石材として珍重され、佐久地方の数多くの文化財に使用されている。

### 2 遺跡の歴史的環境

遺跡が立地する湯川左岸、平尾富士山麓南西面に広がる台地には数多くの遺跡が存在する。旧石器時代の遺跡と



第2図 周辺遺跡

しては香坂の八風山遺跡群がある。C14の年代測定で、32,000年BPの古い石器群と、縄文時代草創期の大型石槍製作遺跡が調査されている。縄文時代の遺跡は下平尾の山伏木や戸坂遺跡群で縄文時代中期～後期の遺構が検出されている。安原の池端遺跡や権現平遺跡では宅地造成に伴う調査で、前期の多量の遺物や中期初頭の遺物が出土している。弥生時代の遺跡は戸坂遺跡群や和田上遺跡群で後期の遺跡が調査されている。古墳時代前期・中期の集落や古墳は判然としないが、台地の山際平坦面や、尾根端部には横根、矢口、平、城、矢沢、一本松、丸山、入大久保などの古墳群が存在し、墓域が形成されている。これらの古墳は小規模なものがほとんどであり、時期的にも後期～終末期の古墳である。このような群集墳に対し、遺跡の北東方向に存在する安原大塚古墳は、佐久市内に存在する古墳としては三河田大塚古墳に次ぐ規模の石室が構築されている。後期の集落は馬瀬口遺跡や、四ツ塚遺跡Ⅱなどで検出されている。奈良・平安時代に入ると筒畑遺跡群とその周辺部では集落遺跡が急増する。戸坂遺跡群供養塚遺跡・四ツ塚遺跡Ⅰは奈良時代、高師町遺跡では平安時代の集落が検出されている。中世の遺跡としては燕城址、浅井城跡、鳥坂城跡、池端城跡などの城跡の他に、四ツ塚遺跡Ⅰでは竪穴建物址が検出されている。

### 3 基本層序

基本層序は第3図のとおりである。田端遺跡は未発達田切谷の縁辺に立地している。地山は浅間火山の軽石流の堆積層であるため、極めて保水性に乏しく、凝結力が弱い。水田には不向きな土質のため、畑地として利用される事が多い。



第3図 基本層序模式図

## 第4節 検出遺構・遺物の概要

検出された遺構・遺物の概要は以下のとおりである。

○遺構 竪穴住居址－3軒、掘立柱建物址－2棟、ピット－90基

○遺物 縄文土器、土師器、須恵器、石器、鉄器

# 第Ⅱ章 遺構と遺物

## 第1節 住居址

○H1号住居址 (第4・5図)

い7グリットで検出された。他遺構との重複関係は有さない。平面は長方形で、N-12.5°-Eに長軸方位をとる。長軸長-4.0m、短軸長-3.52m、深度-0.74m、面積-14.99㎡の規模を有する。主柱穴は4基で、方形に均等配置されている。主柱穴の他に、東西の壁下と東北・西北角の壁下に計5基の壁柱穴が認められる。東壁中央南部分で1箇所途切れるが、壁下には周溝が巡る。カマドは北壁の中央部分に粘土と石で構築されるが、壊れている。

遺物は土師器、須恵器、縄文土器、石器が出土している。土師器には坏(1・2)、武蔵甕(4・5)の器種が認められる。坏は2点共に内面はヘラミガキ後黒色処理、底部はヘラケズリが施されている。武蔵甕は口縁部に最大径を有する。須恵器には有台坏(3)、甕(6・7)、壺(8)の器種が認められる。有台坏は底部ヘラケズリ処理が施されている。甕は2点共に破片資料であり、外面は平行叩目、内面には当具痕が認められる。壺は口縁部片のため器形は断定できない。縄文土器は4点の破片が出土している。摩耗は認められないため、遺跡群内に縄文時代の遺構が存在する可能性が高いものと思われる。全てのもので沈線区画内に縄文が施されており、縄文時代中期後半加曾利E式後半のものである。石器は13の磨石、14の敲石が出土している。

以上の出土遺物は、聖原遺跡の時期区分「奈良平安時代Ⅱ期」に比定される。実年代は8C第Ⅱ四半期が想定される。

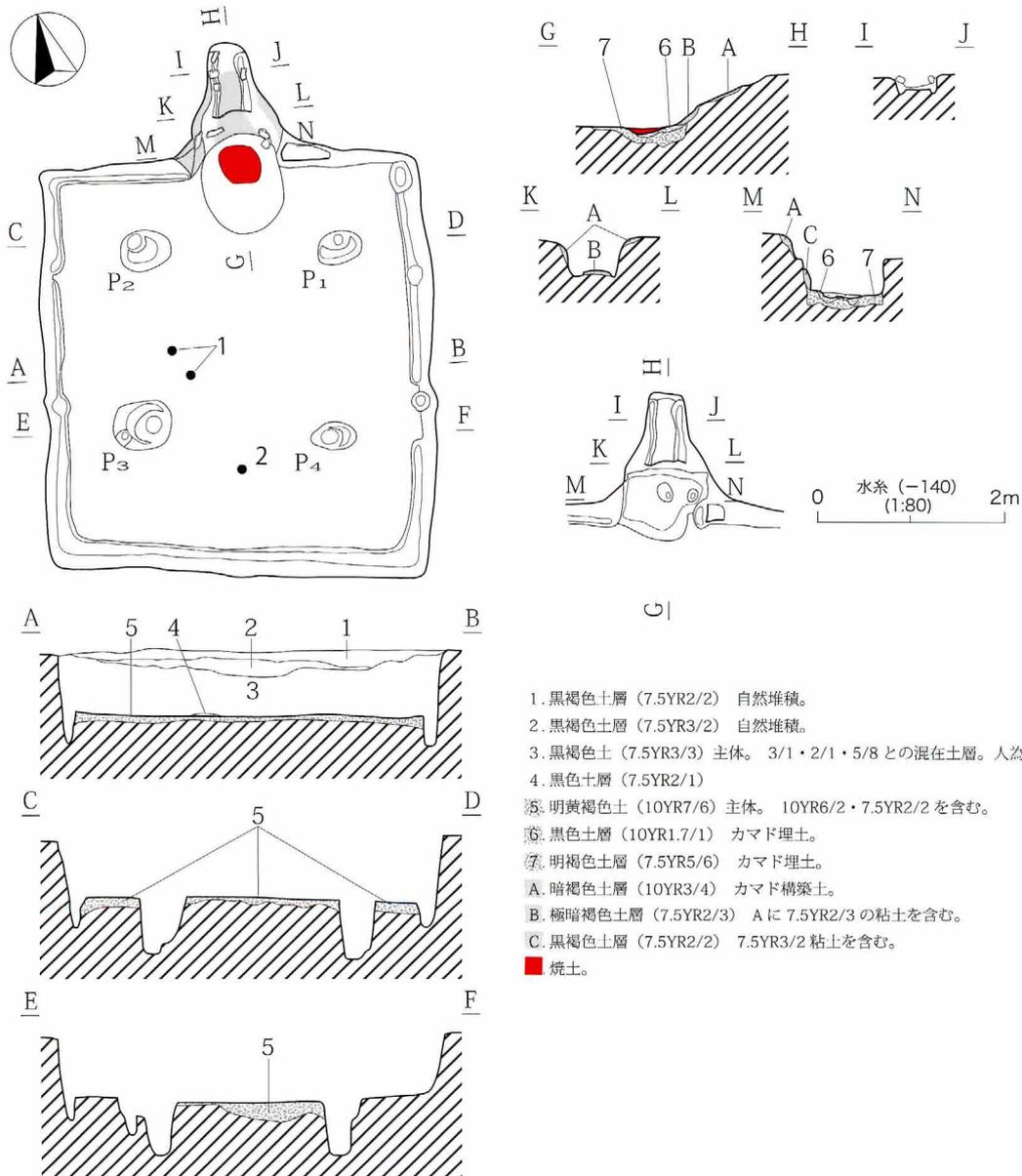
○H2号住居址 (第6・7図)

あ3グリットで検出された。他遺構との重複関係は有さない。平面は方形で、N-20°-Wに長軸方位をとる。長軸長-4.44m、短軸長-4.4m、深度-0.76m、面積-21.75㎡の規模を有する。主柱穴は4基で、方形に配置されるが、均等ではない。壁下には周溝が巡るが、東壁下～南壁下東半分は、溝ではなく小径のピットが不規則な間隔で並ぶ。南壁下中央部分には出入口施設が構築されている。梯子状の階段を固定したであろう4基の小径ピットが2基一組で長方形の浅い掘り込みの縁に穿たれている。カマドは北壁の中央部分に構築されている。石芯を土で

被覆したものとされるが、壊れていた。

遺物は土師器、須恵器、鉄器、石器が出土している。土師器には坏（1～4）、甕（14～18）、小型壺（19）の器種が認められる。坏は所謂「機内系暗文坏」（1～3）と内面黒色処理のもの（4）が認められる。前者は放射状＋見込部に二重螺旋を施すもので、外面はヘラケズリである。後者の底部もヘラケズリである。甕は武蔵甕（14・15）と台付の武蔵甕（18）、丸底のもの（16・17）の3種類が認められるが、17・18も胎土・調整・色調は武蔵甕と同様である。小型壺は須恵器模倣で、所謂「薬壺」の形態である。須恵器には坏（5～11）、有台坏（12・13）、甕（20・21）の器種が認められる。坏の底部はヘラ切り・ヘラケズリであり、糸切りのものは存在しない。注目すべき資料として、5の刻書がある。「信」の一字が体部に焼成前に刻書されている。比較的古い時期の文字資料としての希少性もあるが、信濃の「信」であることも注目する要因のひとつである。有台坏も底部ヘラ切り・ヘラケズリである。甕は破片資料である。外面は平行叩目、内面は青海波紋の当具痕が認められるが、20はナデ調整により消去している。石器は22の黒曜石製の石匙が1点出土している。縄文時代の遺物であり、混入品である。鉄器は23の刀子と、24の不明品の2点が出土している。

以上の出土遺物は、聖原遺跡の時期区分「奈良平安時代Ⅱ期」に比定される。実年代は8C第Ⅱ四半期が想定される。



第4図 H1号住居址

○H 3号住居址 (第8図)

え7グリットで検出された。北側をカクランにより破壊され、全体の30%ほどが残存していた。そのため全容は不明である。深度0.48mの規模である。調査範囲の東壁から南壁の西南角手前まで壁下に周溝が巡る。2基検出されたピットは主柱ではないものと思われる。

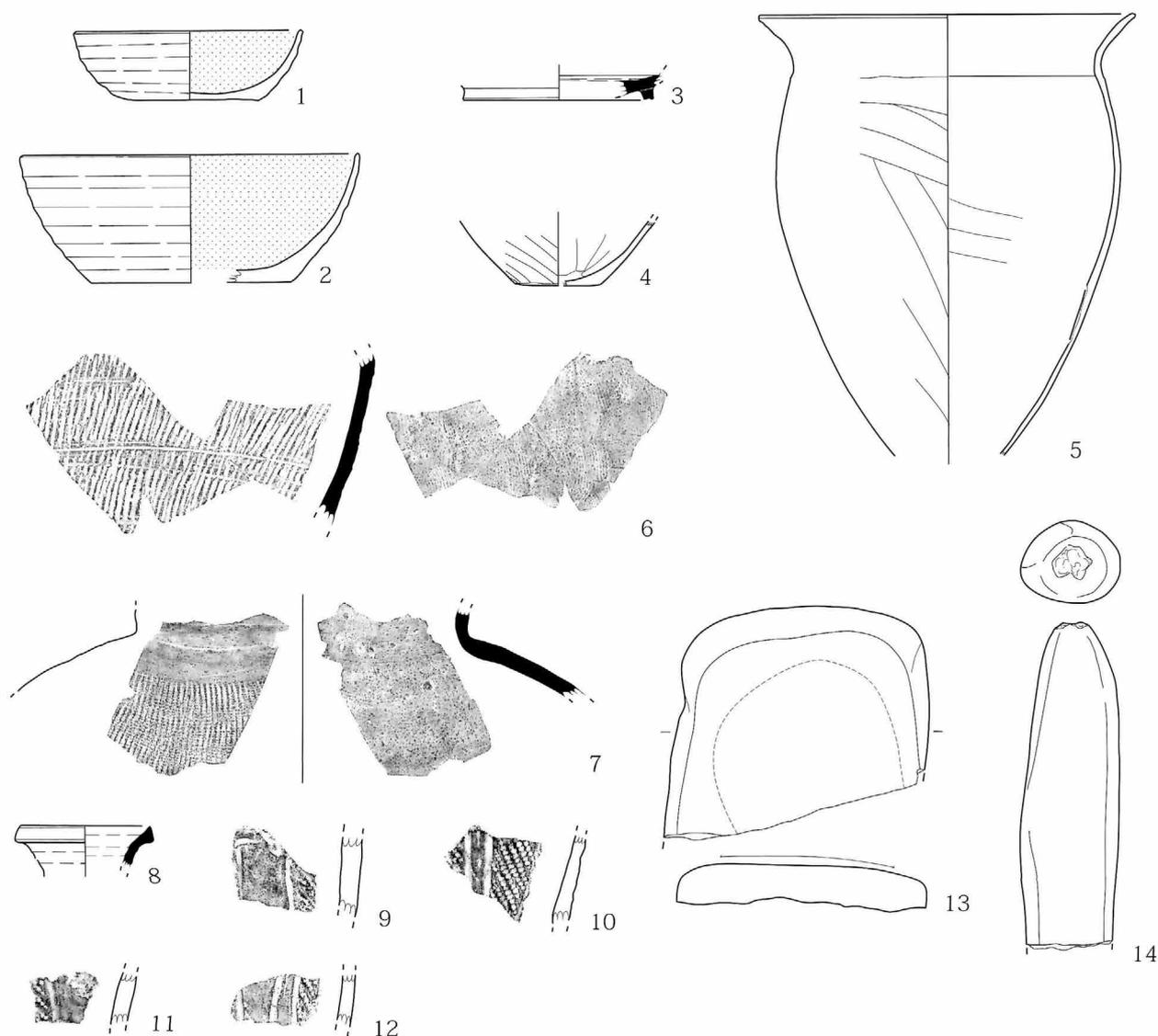
遺物は破片資料が多く、図化出来るものは須恵器坏が1点だけである。底部は回転ヘラ切りである。

以上の出土遺物は、聖原遺跡の時期区分「奈良平安時代Ⅱ期」に比定される。実年代は8C第Ⅱ四半期が想定される。

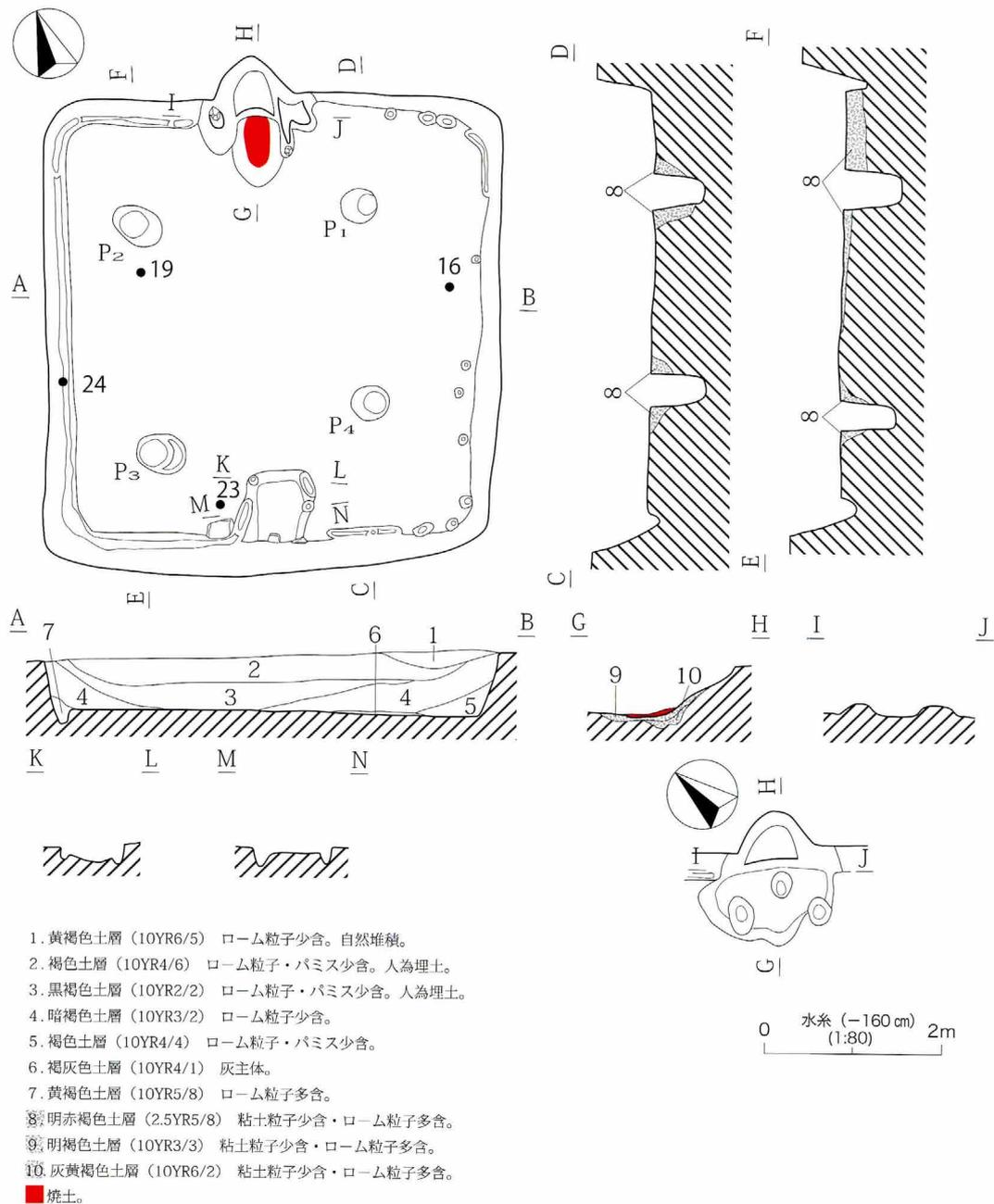
## 第2節 掘立柱建物址

○F 1号掘立柱建物址 (第9・10図)

き2グリットで検出された。桁行3間、梁行2間の側柱式で、長方形の平面形を呈する。重複関係は本址を構成する10基のピットに関しては有さない。N-16° - Eに長軸方位をとり、桁行長-5.15m、梁行長-4.3m、桁行の柱間-1.7m、梁行の柱間-2.45m、深度-0.78m、面積-22㎡の規模である。構成するピットの平面形態は、東辺と北辺中央を合わせた5基が長方形、他の5基は不整形あるいは円形である。これは、柱の建替えが行われた結果で



第5図 H 1号住居址出土遺物



第6図 H2号住居址

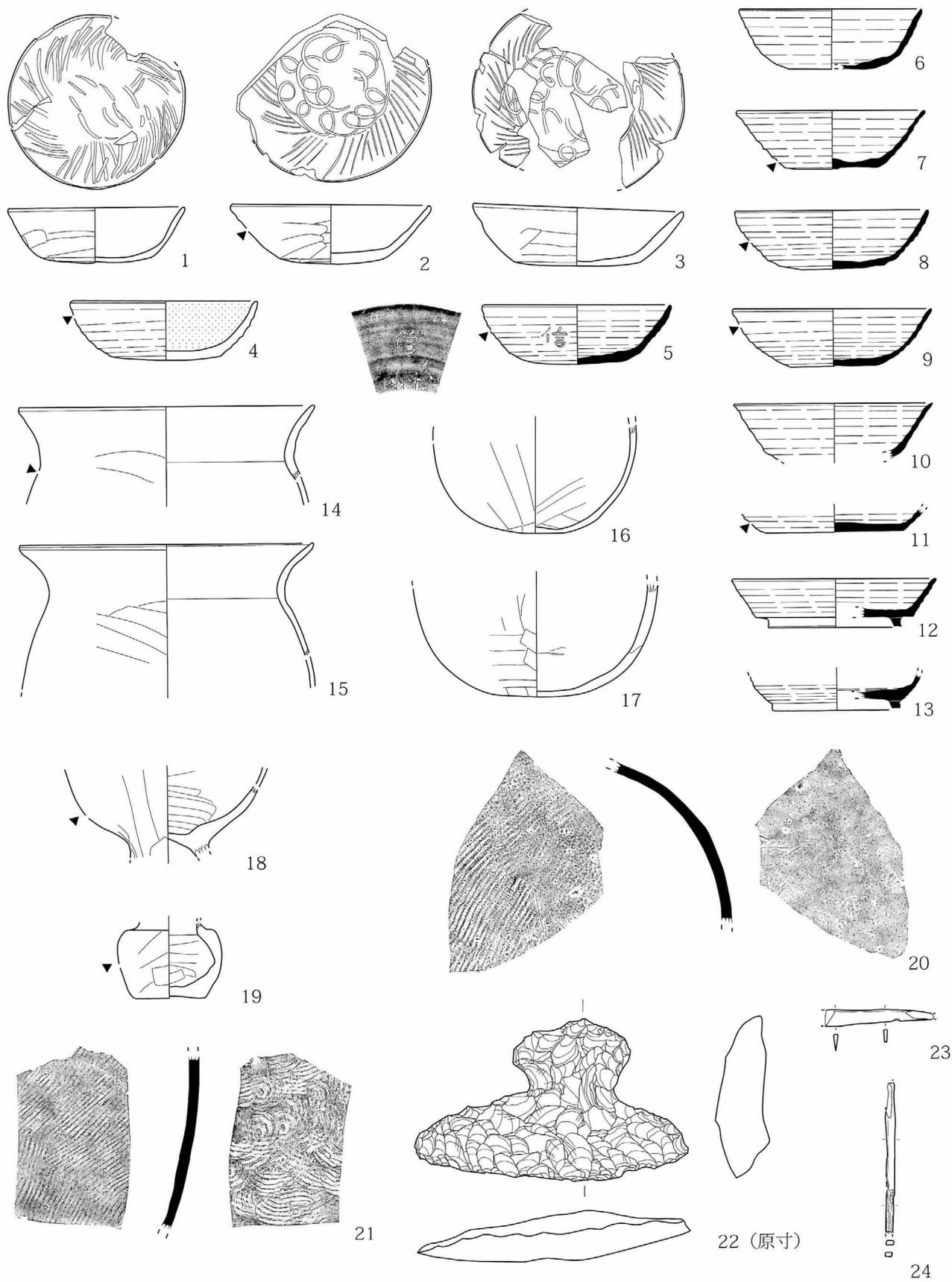
あろう。

遺物は土師器、須恵器が出土している。土師器は1の小型甕、須恵器は2の坏と3の坏蓋の器種が認められる。坏底部は回転ヘラ切りである。

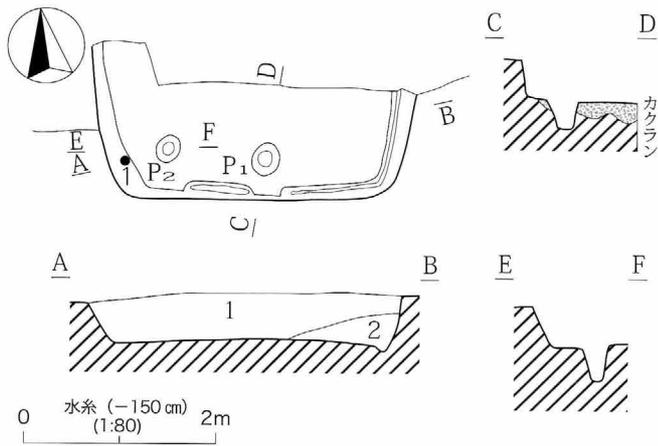
以上の出土遺物は、聖原遺跡の時期区分「奈良平安時代Ⅱ期」に比定される。実年代は8C第Ⅱ四半期が想定される。

○F2号掘立柱建物址 (第11図)

き3グリッドで検出された。桁行2間、梁行2間の側柱式であるが平面形は、梁行中央のピットが2基共に外側に飛び出すため六角形である。N-83°-Wに長軸方位をとり、桁行長-3.75m、梁行長-3.21m、桁行の柱間-1.9m、梁行の柱間-1.6m、深度-0.5m、面積-12㎡の規模である。構成するピットの平面形態は円形であるが、P3・P6の2基だけは雪だるま状である。



第7图 H2号住居址出土遺物



- 1. 黒褐色土層 (7.5YR2/2) ローム粒子・パミス少含。自然堆積。
- 2. 暗赤褐色土層 (5YR3/3) 主体。5YR2/1 混在。ローム粒子・パミス多含。人為埋土。
- 3. 褐色土層 (10YR4/6) ローム粒子多含。



第8図 H3号住居址

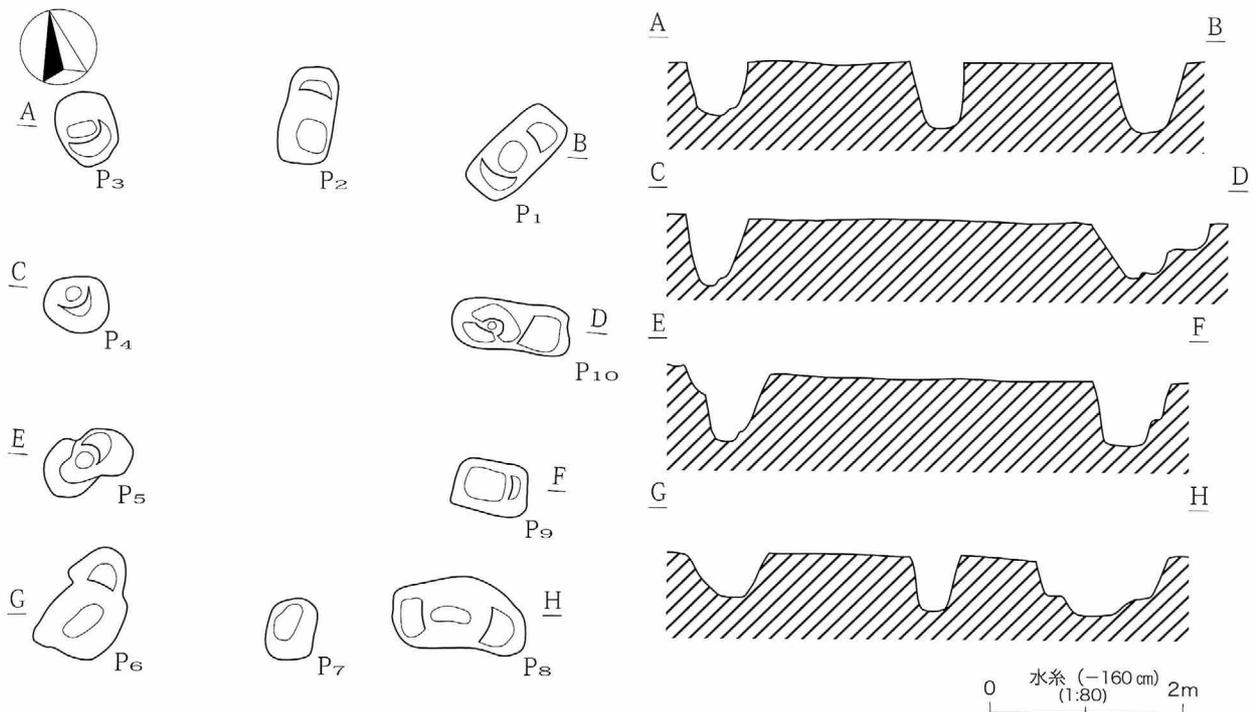
出土遺物は皆無であり時期は不明であるが、F1号掘立柱建物址の長軸方向と、本址の短軸方向は同一であり、しかも2棟が隣接して構築されていることから、併存していた可能性が強いものと推測される。そうであるならば、本址の所属時期はF1号掘立柱建物址と同じであろう。

### 第3節 ピット

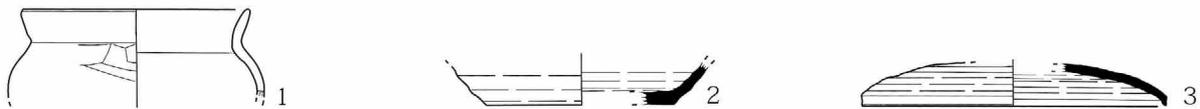
#### ○ピット (第12図)

F1・F2号掘立柱建物址周辺に集中して90基検出されている。掘立柱建物址を構成する可能性が強いものも存在するが、今回の調査範囲の様相からは判断できない。平面形態は円形、断面は逆梯形のものが主体であるが、楕円形や長方形のものも存在する。規模的には長径40.8cm、短径34.2cm、深度27.3cmが平均値である。

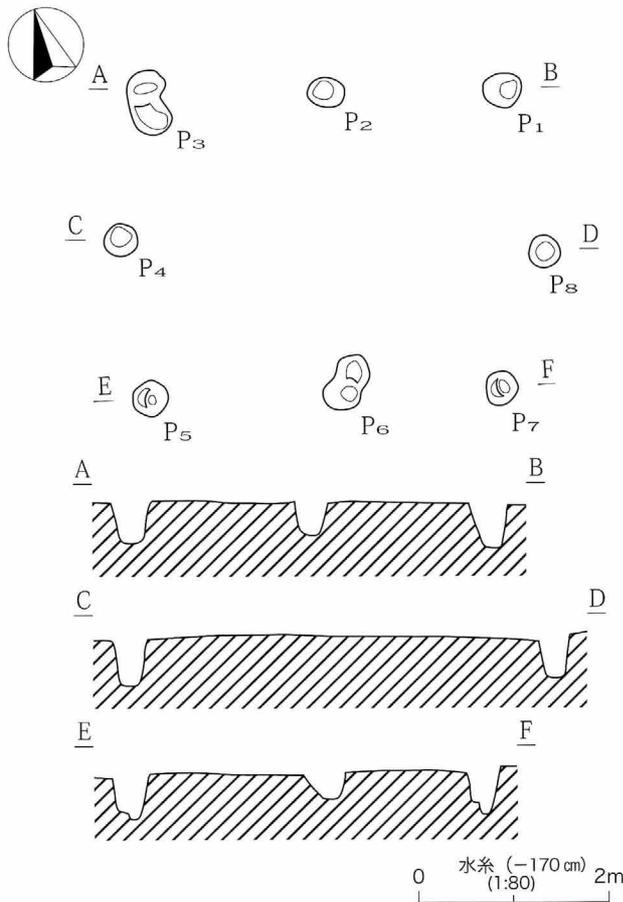
出土遺物は土器の小破片がわずかに認められる程度であり、遺構の年代を決定出来るものは存在しない。



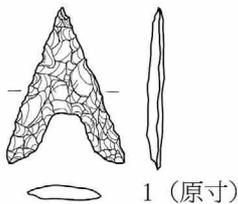
第9図 F1号掘立柱建物址



第10図 F1号掘立柱建物址出土遺物



第11図 F2号掘立柱建物址



第13図 遺構外出土遺物

本文中でもふれたが、「信」刻書の須恵器杯の存在も注意が必要である。佐久地方において墨書・刻書土器が隆盛するのは奈良平安時代V期以降である。つまり平安時代に入ってからである。奈良時代の墨書・刻書土器は希少な遺物であり、焼成前に刻まれた刻書土器は貴重な文字資料である。

遺構名	検出位置	重複関係	主軸方位	長軸長	短軸長	壁残高	面積	ピット	付属施設	備考	時期
H1	い7	なし	N-12.5°-E	4.00	3.52	0.74	14.99	主4	周溝	粘土カマド	奈良平安II期
H2	あ3	なし	N-51°-E	4.44	4.40	0.76	21.75	主4	周溝	カマド	奈良平安II期
H3	え7	なし	N-20°-W	—	—	0.48	—	2	周溝	—	奈良平安II期
F1	き2	なし	N-16°-E	5.15	4.30	0.78	22.14	10	—	—	奈良平安II期
F2	き3	なし	N-83°-W	3.75	3.21	0.50	12.03	8	—	—	奈良平安II期

第1表 竪穴住居址・掘立柱建物址計測表

住居址が存在する調査区南部分には展開しないこと、掘立柱建物址との重複関係は有さない事などから、これらのピットも住居址や掘立柱建物址と同一時期の所産の可能性が高い。

## 第4節 遺構外出土遺物

○遺構外出土遺物 (第13図)

チャート製の石鏃が1点出土した。無茎で基部に抉入がはいる形態である。形態的には縄文時代中期のものと思われる。

## 第III章 まとめ

当遺跡群の東南に位置する戸坂遺跡群の供養塚遺跡や戸坂遺跡の調査においても、検出された集落は奈良時代前半のものであった。佐久市北部地域に展開する大規模な古代集落群が多分に政治的な色彩が強いのに比べ、この地域の集落は陳腐な表現であるが一般的な印象である。しかし、遺構の配置は整然としており、律令社会の厳格さも感じる。

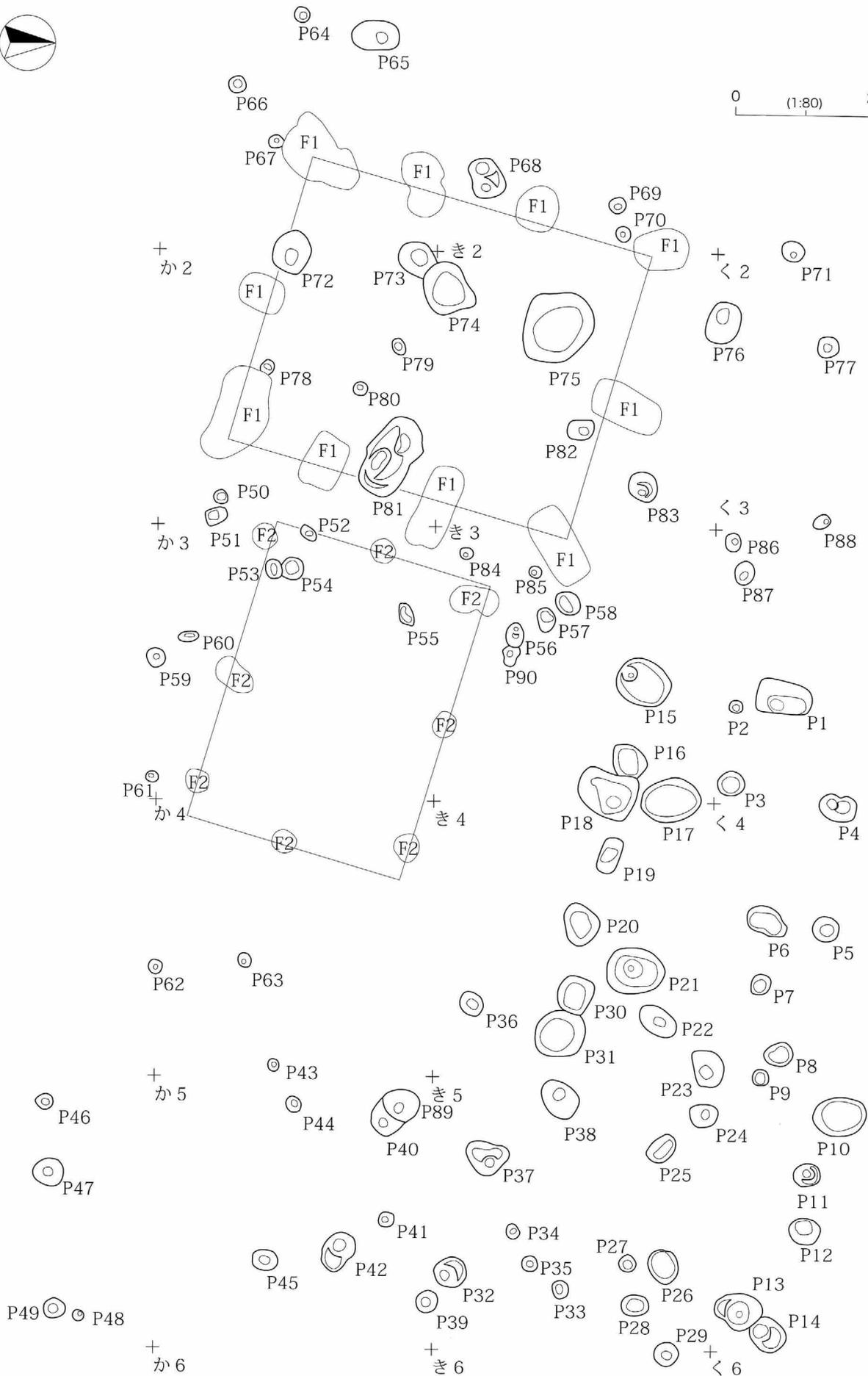
当遺跡が周辺の遺跡と異なる点は、掘立柱建物址の数であろう。他遺跡では掘立柱建物址の数が竪穴住居址に比べ著しく少ないのであるが、当遺跡ではほぼ同

数なのである。竪穴住居址を住民の住居と捉えるならば、これとは明確に空間を隔てて存在する掘立柱建物址群は、一般住民の住居ではない性格・機能を有した建物と推測される。そのような推測を生じさせる遺構の存在が、戸坂遺跡群内の集落との差異であろう。

出土遺物の面からは、住居址の覆土等から出土している少なからぬ量の縄文時代遺物の存在に注意が必要である。全てが中期後半のものであり、劣化はほとんど認められない。遺跡群内に集落が存在する可能性が強いものと思われる。



0 (1:80) 2m



第12図 ピット

No	長径	短径	深度	No	長径	短径	深度
1	79.0	60.0	49.5	46	28.0	24.0	17.0
2	20.0	20.0	3.00	47	44.0	22.0	26.5
3	39.0	28.0	14.0	48	16.0	16.0	15.5
4	55.0	39.0	26.0	49	31.0	26.0	39.5
5	38.0	38.0	17.0	50	19.0	18.0	9.00
6	62.0	43.0	11.0	51	32.0	23.0	14.5
7	30.0	29.0	15.0	52	24.0	18.0	11.5
8	43.0	34.0	22.0	53	30.0	22.0	19.0
9	23.0	22.0	16.5	54	32.0	30.0	23.0
10	76.0	56.0	37.0	55	30.0	20.0	16.5
11	38.0	36.0	22.0	56	(36.0)	25.0	20.0
12	46.0	38.0	41.0	57	34.0	26.0	20.0
13	64.0	52.0	59.5	58	34.0	34.0	14.0
14	52.0	46.0	31.5	59	28.0	28.0	27.0
15	78.0	66.0	51.0	60	32.0	14.0	7.00
16	50.0	46.0	24.0	61	19.0	17.0	9.00
17	87.0	64.0	12.0	62	20.0	20.0	31.0
18	84.0	66.0	55.0	63	20.0	20.0	11.5
19	52.0	28.0	31.0	64	22.0	22.0	24.0
20	64.0	50.0	19.0	65	68.0	41.0	37.0
21	83.0	66.0	48.0	66	26.0	22.0	30.0
22	61.0	38.0	55.0	67	24.0	17.0	11.0
23	52.0	40.0	36.0	68	58.0	47.0	35.0
24	40.0	33.0	40.0	69	26.0	20.0	34.0
25	46.0	32.0	11.0	70	23.0	20.0	18.0
26	50.0	43.0	26.0	71	32.0	30.0	26.0
27	24.0	22.0	19.5	72	60.0	55.0	49.0
28	38.0	32.0	19.0	73	52.0	50.0	19.0
29	35.0	35.0	49.5	74	76.0	60.0	59.0
30	52.0	48.0	29.0	75	102.0	96.0	28.0
31	70.0	68.0	39.0	76	60.0	46.0	21.0
32	58.0	46.0	55.0	77	30.0	30.0	36.0
33	26.0	24.0	10.0	78	20.0	18.0	24.0
34	22.0	18.0	9.00	79	26.0	18.0	9.00
35	22.0	20.0	21.0	80	20.0	20.0	22.0
36	36.0	32.0	40.0	81	121.0	70.0	62.0
37	56.0	48.0	46.0	82	38.0	30.0	35.0
38	46.0	45.0	13.5	83	44.0	41.0	51.0
39	33.0	3.0	54.0	84	18.0	18.0	22.0
40	—	42.0	39.0	85	16.0	16.0	22.0
41	21.0	21.0	2.50	86	26.0	22.0	25.0
42	58.0	44.0	25.5	87	36.0	28.0	40.0
43	20.0	15.0	19.0	88	26.0	20.0	17.0
44	24.0	20.0	18.5	89	52.0	46.0	36.0
45	37.0	30.0	37.5	90	28.0	23.0	15.0

第2表 ピット計測表

No	器種	器形	法 量				成 形・調 整		備 考	出土層位
			口径(長)	底径(短)	器高(厚)	重量等	内 面	外 面		
1	土師器	坏	13.0	7.8	4.1		ヘラミガキ・黒色処理	底部ヘラケズリ	完全実測	3層
2	土師器	坏	(19.4)	(11.4)	7.4		ヘラミガキ・黒色処理	底部ヘラケズリ	回転実測	3層
3	須恵器	有台坏	—	(11.0)	< 3.7 >		ロクロナデ	回転ヘラ切り後付高台	回転実測	3層
4	土師器	武蔵甕	—	(5.0)	< 3.7 >		ナデ	ヘラケズリ	回転実測	覆土
5	土師器	武蔵甕	(21.4)	—	< 25.5 >		ナデ	ヘラケズリ	回転実測	H1・H2
6	須恵器	甕	—	—	—		当具痕	平行叩目	破片実測	H1・H2
7	須恵器	甕	—	—	< 5.2 >		当具痕	平行叩目	破片実測	覆土
8	須恵器	壺	7.4	—	< 2.5 >		ロクロナデ	ロクロナデ	回転実測	3層
9	縄文土器	深鉢	—	—	—		沈線、縄文		破片実測	覆土
10	縄文土器	深鉢	—	—	—		沈線、縄文		破片実測	覆土
11	縄文土器	深鉢	—	—	—		沈線、縄文		破片実測	覆土
12	縄文土器	深鉢	—	—	—		沈線、縄文		破片実測	覆土
13	石器	磨石	< 6.8 >	< 7.6 >	< 1.9 >	< 121.02 >	裏面欠損、正面磨面		完全実測	I区II層
14	石器	敲石	< 9.5 >	< 2.9 >	< 2.3 >	< 75.43 >			完全実測	覆土

第3表 H1号住居址出土遺物観察表

No	器種	器形	法 量				成 形・調 整		備 考	出土層位
			口径(長)	底径(短)	器高(厚)	重量等	内 面	外 面		
1	土師器	坏	12.5	7.8	4.1		放射・螺旋暗文	ヘラケズリ	完全実測	覆土
2	土師器	坏	(14.2)	7.4	4.3		放射・螺旋暗文	ヘラケズリ	完全実測	覆土
3	土師器	坏	14.9	9.0	4.4		放射・螺旋暗文	ヘラケズリ	完全実測	I区・P1・P2
4	土師器	坏	(13.1)	7.7	4.2		ヘラミガキ・黒色処理	底部ヘラケズリ	完全実測	覆土
5	須恵器	坏	(13.4)	7.2	4.3		底部ヘラケズリ、「信」刻書		完全実測	覆土
6	須恵器	坏	(13.0)	(6.0)	4.4		ロクロナデ	底部ヘラケズリ	回転実測	覆土
7	須恵器	坏	(13.4)	6.5	4.2		ロクロナデ	回転ヘラ切り	完全実測	覆土
8	須恵器	坏	(13.6)	7.5	4.2		ロクロナデ	底部ヘラケズリ	完全実測	覆土
9	須恵器	坏	(14.0)	6.0	4.1		ロクロナデ	底部ヘラケズリ	完全実測	覆土
10	須恵器	坏	(14.0)	—	4.0		ロクロナデ	ロクロナデ	回転実測	覆土
11	須恵器	坏	—	9.6	< 1.7 >		ロクロナデ	回転ヘラ切り	完全実測	覆土
12	須恵器	有台坏	(14.4)	(9.4)	3.5		ロクロナデ	回転ヘラ切り後付高台	回転実測	覆土
13	須恵器	有台坏	—	(9.0)	< 2.6 >		ロクロナデ	回転ヘラ切り後付高台	回転実測	覆土
14	土師器	武蔵甕	20.8	—	< 7.1 >		ナデ	ヘラケズリ	完全実測	覆土
15	土師器	武蔵甕	(20.6)	—	< 10.3 >		ナデ	ヘラケズリ	回転実測	覆土
16	土師器	甕	—	—	< 7.7 >		ナデ	ヘラケズリ	完全実測	I区5層
17	土師器	甕	—	—	< 7.9 >		ナデ	ヘラケズリ	回転実測	覆土
18	土師器	台付武蔵甕	—	—	< 6.3 >		ナデ	ヘラケズリ	完全実測	覆土
19	土師器	小型壺	—	5.0	< 5.4 >		ナデ	ナデ	完全実測	I区5層
20	須恵器	甕	—	—	—		当具痕	平行叩目	破片実測	覆土
21	須恵器	甕	—	—	—		当具痕	平行叩目	破片実測	覆土
22	石器	石匙	2.9	4.8	0.8	7.81	黒曜石		完全実測	II区1層
23	鉄器	刀子	< 7.7 >	< 1.2 >	< 0.3 >	< 8.16 >	両端欠損		完全実測	III区3層
24	鉄器	不明	< 10.9 >	< 0.7 >	< 0.4 >	< 10.0 >	上下欠損、木質付着		完全実測	III区4層

第4表 H2号住居址出土遺物観察表

No	器種	器形	法 量				成 形・調 整		備 考	出土層位
			口径(長)	底径(短)	器高(厚)	重量等	内 面	外 面		
1	須恵器	坏	14.2	8.2	4.1		ロクロナデ	回転ヘラ切り	完全実測	床

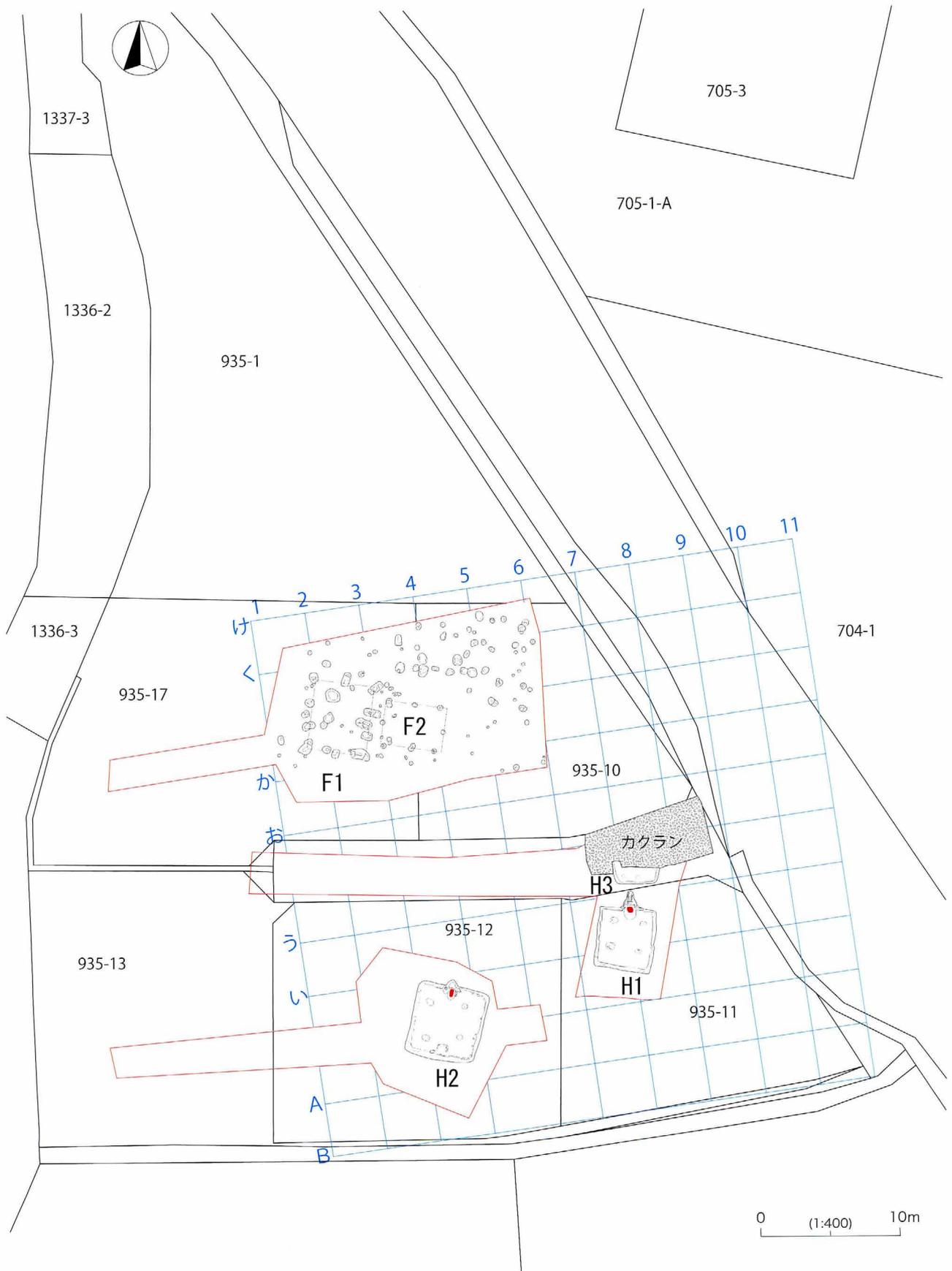
第5表 H3号住居址出土遺物観察表

No	器種	器形	法 量				成 形・調 整		備 考	出土層位
			口径(長)	底径(短)	器高(厚)	重量等	内 面	外 面		
1	須恵器	坏蓋	(18.0)	—	< 2.3 >		ロクロナデ	回転ヘラケズリ	回転実測	
2	須恵器	坏	—	(10.0)	< 2.3 >		ロクロナデ	回転ヘラ切り	回転実測	
3	土師器	甕	(12.0)	—	< 4.7 >		ナデ	ヘラケズリ	回転実測	

第6表 F1号掘立柱建物址出土遺物観察表

No	器種	器形	法 量				成 形・調 整		備 考	出土層位
			口径(長)	底径(短)	器高(厚)	重量等	内 面	外 面		
1	石器	石鏃	2.1	1.6	0.15	0.37	チャート		完全実測	

第7表 遺構外出土遺物観察表



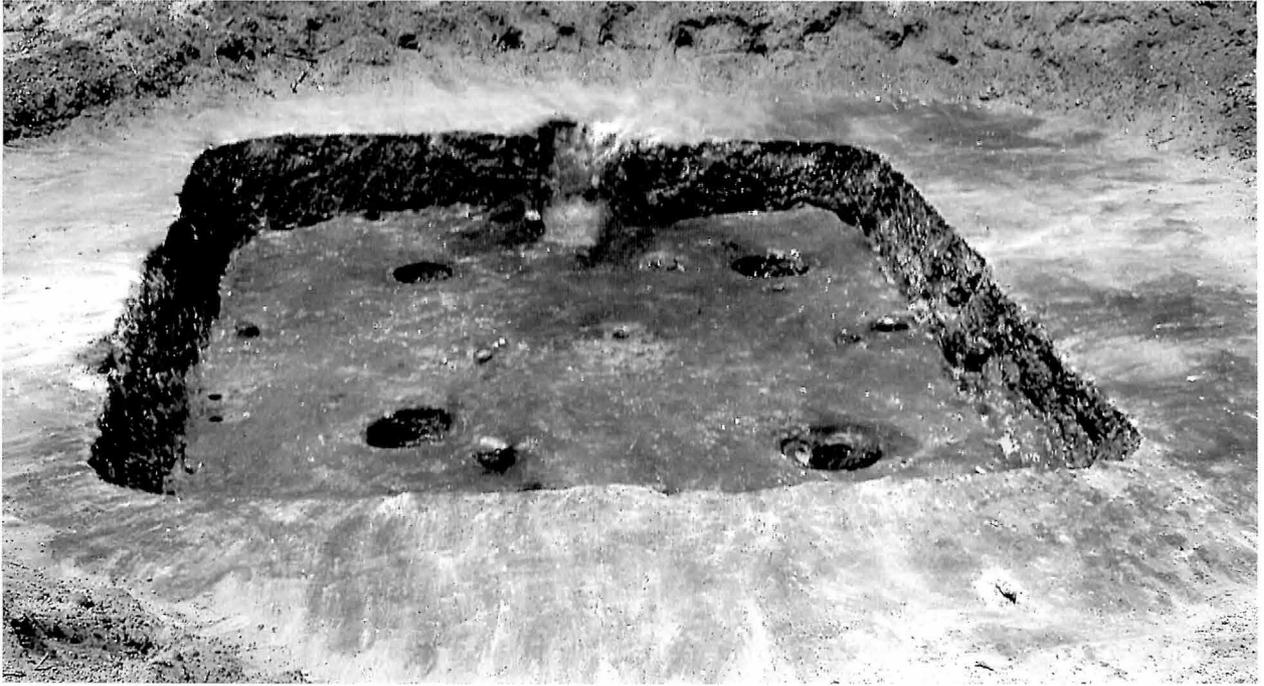
第 14 図 田端遺跡全体図



H 1 号住居址



H 1 号住居址カマド



H 2号住居址



H 2号住居址カマド



H 3 号住居址



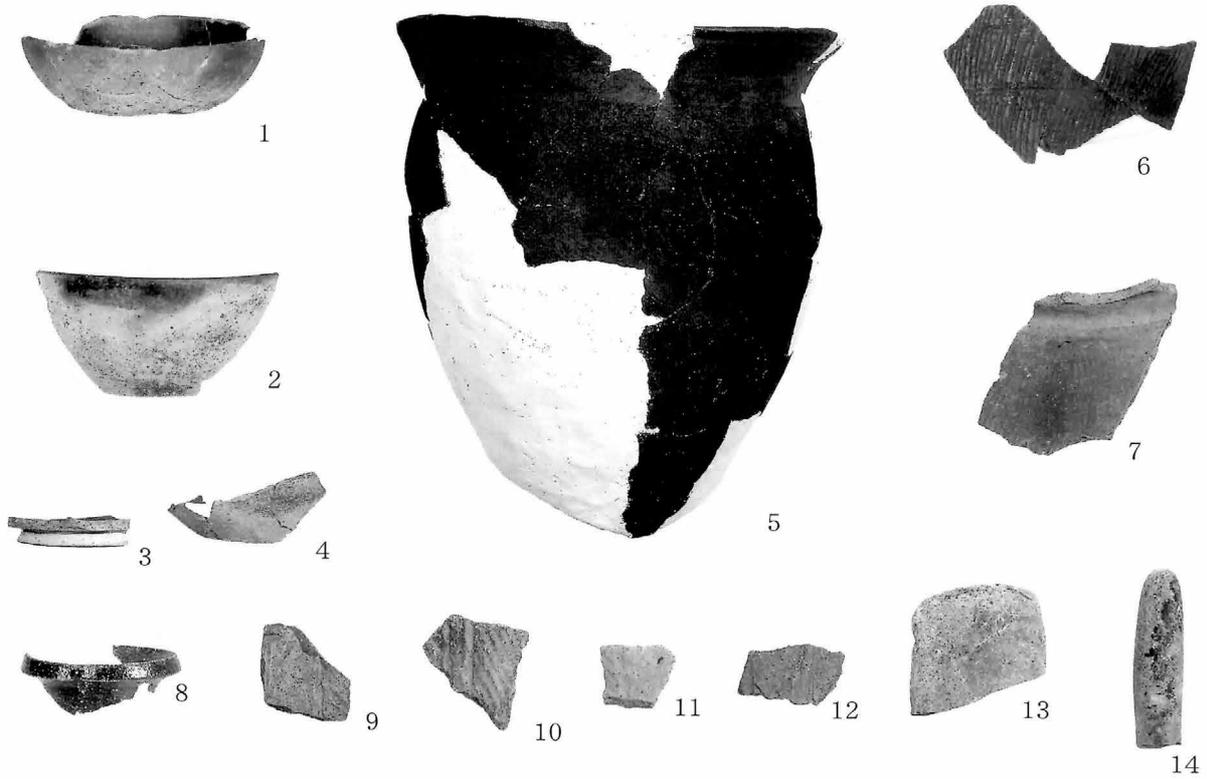
F 1 号掘立柱建物址



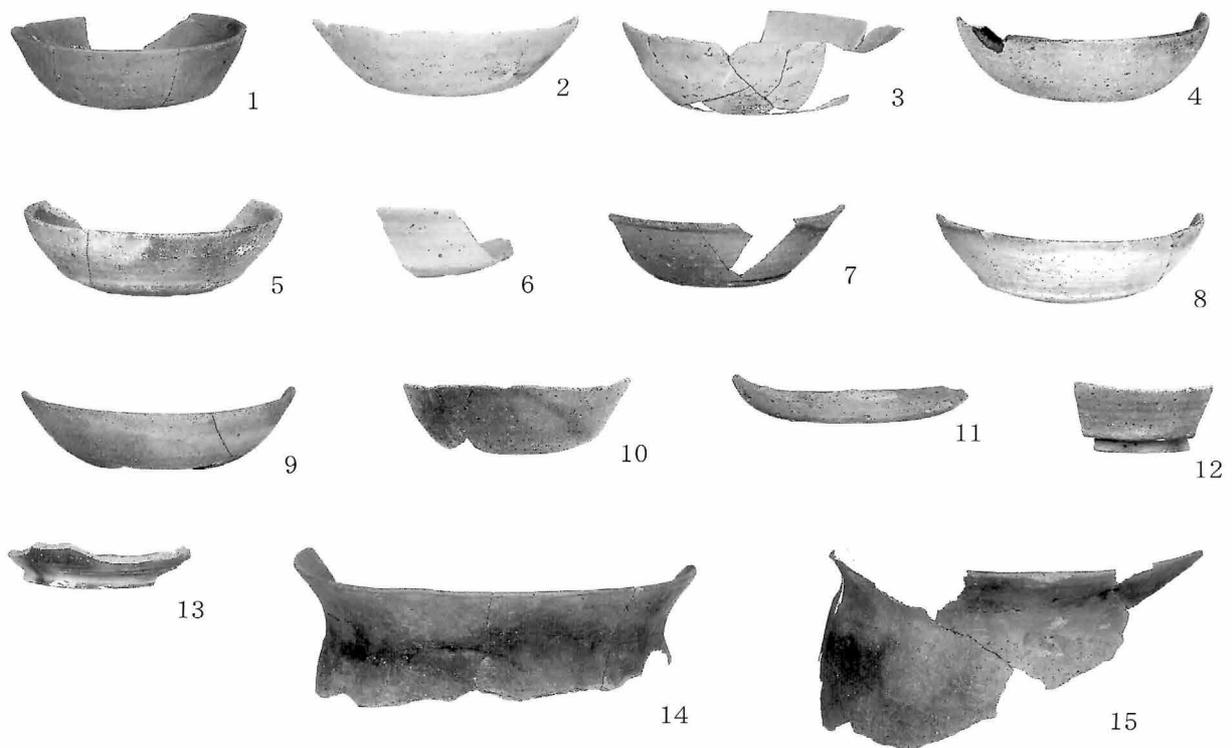
F 2号掘立柱建物址



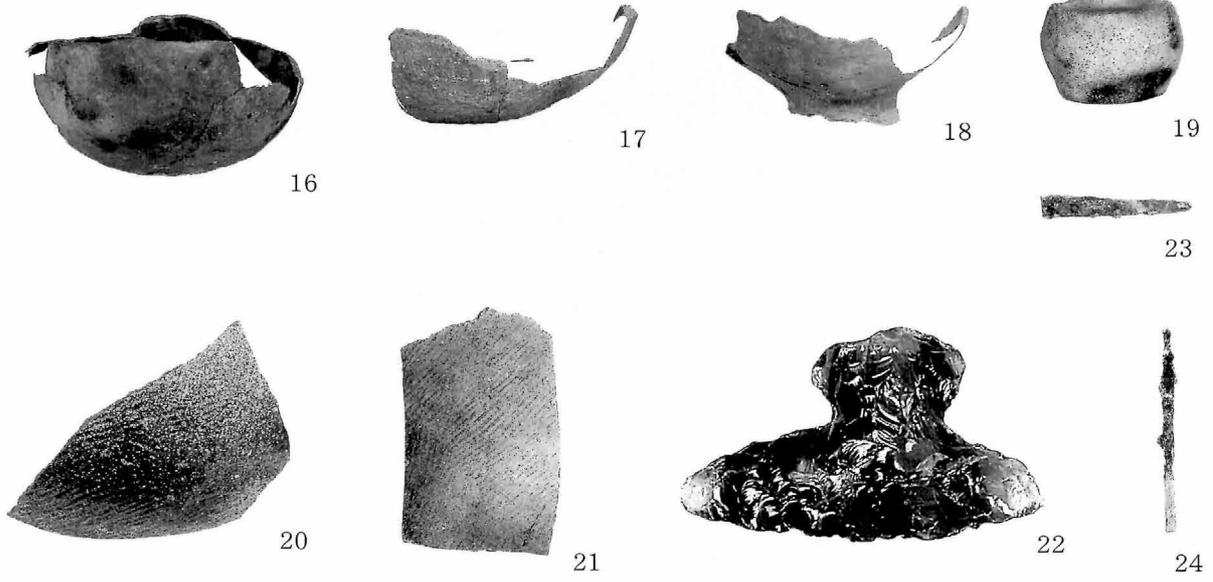
F 1・F 2号掘立柱建物址周辺ピット群



H 1号住居址出土遺物



H 2号住居址出土遺物 (1)



H 2号住居址出土遺物 (2)



H 3号住居址出土遺物



F 1号掘立柱建物址出土遺物



遺構外出土遺物

## 報 告 書 抄 録

ふりがな	たばたいせき
書名	田端遺跡 I
シリーズ名	佐久市埋蔵文化財調査報告書 第220集
編集者名	小林真寿
編集機関	佐久市教育委員会
発行機関	佐久市教育委員会
発行年月日	20140331
郵便番号	385-0006
電話番号	0267-68-7321
住所	長野県佐久市志賀5953
ふりがな	たばたいせき
遺跡名	田端遺跡 I
ふりがな	ながのけんさくしあらこだ
遺跡所在地	長野県佐久市新子田935-12他
遺跡番号	130-2
北緯	36.15.43
東経	138.30.2
調査期間	19890705-19890708
調査原因	宅地造成
調査面積	1,826㎡
種別	散布地・集落遺跡
主な時代	縄文時代中期・奈良時代
遺跡概要	遺構-竪穴住居址3(奈)、掘立柱建物址2(奈)、ピット90(奈) 遺物-縄文土器、土師器(奈)、須恵器(奈)、石器、鉄器
特記事項	奈良時代「信」刻書須恵器坏が出土した。

---

佐久市埋蔵文化財調査報告書 第220集  
筒畑遺跡群 田端遺跡 I

平成26（2014）年3月

編集・発行 佐久市教育委員会  
〒385-8501 長野県佐久市中込3056  
社会教育部 文化財課  
〒385-0006 長野県佐久市志賀5953  
TEL0267-68-7321

印刷所 キクハラインク(有)

---

